

遠い終戦の記憶

七里彰人

南京で大虐殺があった日より二週間早く生まれたからといって、僕に日本人としての責任があるのだろうか。

日本海軍が真珠湾を攻撃した時は四歳になって一週間が過ぎたところであった。新聞もまだ読めない僕にとつてなにが起こっていたのか、全く記憶はない。戦争をしている事を感じ始めたのは五歳のころだったと思う。その頃見た絵本に肉弾三銃士という絵があった。三人の兵隊が長くて重そうな爆弾を三人で抱えて敵の戦車に飛び込んでいく絵である。その時三人がどうなるのかは幼い頭でも理解出来た。解説になにが書かれていたのか覚えていないが、六十数年経った今でもその絵本を見た時の恐怖感が残っている。三人の顔がにっこり笑っていたのがなおさら不気味だった。

日本は神の国と言われており、幼児の心は不敗神話に守られて、天皇陛下のために戦うということが頭にインプットされていた。明治生まれの大人たちや大正デモクラシーの中で育った大人たちと違って単純に純粋に信じていた。それは学校へ入学して先生からも教えられたし、父の教育もそうであった。

終戦の前の年、岐阜に住んでいた頃の或る夜、警戒警報が鳴り親たちが電球の傘に黒っぽい風呂敷を被せて外へ光が漏れないようにした。やがて暗闇の上空を飛ぶ飛行機の微かな音が聞こえてきた。窓の外に見える夜空を照らすサーチライトの黄色い光の帯が暗い上空を右へ左へ交錯して暗闇の中を飛ぶ物体を探している。あきらかに敵の爆撃機がこの岐阜県の田舎の空を飛んでいるのだ。何時爆弾を落とすかもしれないと思うと初めて強い恐怖を覚えた。通過する爆撃機の「ブーン」とも「ゴーン」ともつかぬ音は夜空を飛ぶ悪魔の唸り声のようだった。恐ろしさを訴えたかったが両親と四つ上の兄はただお互いにきつい目をして見詰め合っていた。もし爆弾が落ちてきたらどうしよう。その時五つ下の妹が脅えたように泣き出した。父が目配せし母が二歳になる妹の口を塞いだ。

翌年、現実に爆撃を受け父は重傷を負い一家は路頭に迷うことになるのは、その時は想像もしなかった。ただこの時さえ過ぎればいいとだけ思っていた。

翌年一九四五年の春、僕たち家族は岐阜から愛知県の岡崎市に引っ越して住んでいた。町の中央を蛇行する矢作川の支流である乙川に近い公会堂の前の大きな民家の二階に間借りして、父はその年開校したばかりの高等師範学校へ教師として通っていた。僕は小学校二年生で、その当時は国民学校となっていたが、軍国児童らしく道をすれ違う軍人を見る

と両足をきちつと揃えて胸を張って敬礼をしていたのを覚えている。子供ながら軍国児童に誇りを持っていた。だが実際の戦局は暗転し始めていたようだ。僕にはそんなことは知る由もなかった。風船爆弾がアメリカに届いて大きな打撃を与えたとか、南方の島々でも日本軍は勝利して、ますます意気が上がっているとか、そんな話ばかりだった。

軍部がラジオで発表する大本営発表を信じきっていたのである。後に考えてみれば僕が物心がついた頃には丁度負け戦が始まっていた筈である。米軍がルソン島に上陸し硫黄島を占領しついにフィリピンのマニラも占領していた。そして前の年の十一月から始まった百六回に及ぶ東京空襲のうち最も悲惨な三月の東京大空襲で十万人が死んだことも、名古屋や大阪が空襲され、全国何十箇所も空爆されていた事など何一つ知らなかったのである。確かにいつの間にか食べるものが少なくなり、麦ごはんが芋ごはんに変わり、大豆の煮たもののおかずだけとか、カボチャの煮物のおかずだけだったりした。

家の近くの公会堂に鉄で出来たものを持っていくのを手伝った時、供出された鉄の中にお寺の鐘があった。お国の為にこれが大砲の弾になるのだと母が教えてくれたが、母の話し方の中になにか懐疑的な匂いを嗅いだ気がして、暗い気持ちになった。そういえば三歳か四歳の頃買ってもらった三輪車は車輪が木で出来ていた。

一九四五年七月二十日の夜がきた。その当時流行っていた占いにコックリさんというのがある、それによると、その日の前後に岡崎が空襲を受けると大人たちが噂していたので、特に警戒して靴と防空頭巾を枕もとに置き何時でも逃げられるように準備していた。十一時ごろ空襲警報が鳴った。どきどきしながら防空頭巾を被り靴を履いて、二階から階段を降りて庭に出ると遠い南の空が真っ赤に染まっている。爆弾の炸裂する音が聞こえた。

「あそこは矢作の方だろうか、南に飛行場があるから爆撃されたのだろうか」

「コックリさんが今夜空襲があるといってたのはあのことよ、きっと」

両親はそう云って遠くを眺めていたが、三十分もすると爆撃音が聞こえなくなり空襲警報から警戒警報に変わって、あちらこちらで安堵の人の声が聞こえた。今夜はもう空襲はないだろう、南の飛行場が犠牲になったからこれから先岡崎は空襲はないかもしれないと少し安心した、二階に上がり寝床に戻って寝た。

暫し眠ったと思う。何か異様な気配がしたと同時に大音響とともに大地が揺れた。「ドカン、ドカン、バリバリ」と数発の何かががすぐ近くに落ちた。雷の数倍の音だ。どうやって飛び起き、どうやって階段を降りたか分からない、着の身着のままだった。枕元に用意した靴も防空頭巾も身につけてない。反射的に裸足で転がるように階段を飛び降りるようにして駆け下り縁側から庭へ飛び降りたと思う。準備した事が何もかも意味なくひっくり返った。庭に掘っておいた深さ一メートルほどしかない防空壕に飛び込み顔を出すと、いきなり僕の家全体がそっくりそのまま火柱になって、二階から溶けて流れ落ちる窓のガラスがクルクルと水飴の様にぐるまって地面に溜まるのが見えた。

ワーツと叫んで、

「あれは家ですか、うちですか、私の家ですか」

母が信じられないように地面にくずれるのを見た。僕はその時、うちに決まってるじゃ

ないか、いつも強い母が何故あんな事を言うのだろうと不思議だった。普段優しく強い母の中に弱い女を見た思いがした。俺がすっかりしななければ、逆に恐怖感はその時薄らいだようだ。四つ年上の十二才の兄とともに活発に動いた。学校で教えられた訓練は全く役に立たなかった。闇夜が恐ろしさを半減させていた。もし明るい昼間だったら、上空から襲ってくる多くの大きな弾が空中ではらけて数十個の焼夷弾を吐き出し頭上から落ちてくるのははっきり分かり右往左往した筈だ。地上の火柱と地面に横たわる真っ赤に焼けた無数の物体を裸足でよけて走った。

その時だった、父が燃えている背中の国民服と火の点いた足に巻いたゲートルの姿でよたよたと走りよってきた。

「やられた、やられた」と絶叫していた、

皆で背中の火を消した時父はまだ元気であったが、後に重大なことになる。空襲は冷酷にも二時間は続いた、道を隔てた公会堂の大きい防空壕へ向かったが、もう人で一杯であった。入り口に頭だけ入れた。

「一杯だ、出る出る、後から来やがって、早よ出んか」

怒鳴り声と奥の方で年寄りたちの紋り上げるような読経の音が聞こえた。一人の老婆のひととき甲高い大きな声が耳に残った。僕と兄と妹を背中に縛り付けた母と火傷でやっと歩ける状態まで衰えた父の五人は、仕方なくそこを出て広場を横切り池へ向かった。池の中にも人がいたが、プカプカと俯きになって浮いている死人もいて、おまけに池の横の築山の松の木が燃えていてもうもうたる煙と共に今にも倒れそうだ。とにかく飛び込んで体の熱を冷ました。煙で苦しい。

「そうだ川へいくぞ」誰とも無く叫んだが、それしか方法がなかった。体中が熱いのだ。裸足で足の踏み場もなく火の点いたままの焼夷弾やその欠片が散乱している道の上を走った。途中で溝の中で人がもがいた、腹の皮が切れて、出てきた自分の内臓を自分の手で腹の中に戻そうとしている。思わず立ち止まって見ていると「早く行け早く行け」と急かされる。どんどん先へ走らなければ、後ろから走ってくる大人たちに突き倒されるからだ。

誰も川へ向かっていた。真っ赤な空の下を黒い帯の様に人が連なって川へ向かっていた。

川原にも焼夷弾がいっぱい落ちていたが構わず走って水に飛び込んだ。

人がどんどん増えて浅瀬はまるで暗闇の中の銭湯になった。川の深いところを死体が流れていくのを焼夷弾の火が照らしていた。流れが緩やかなのが救いだった。

どれだけの間じっとしていただろう。やがて爆撃は止み、東の空が明るくなってきた。空全体が火の赤と朝の太陽の光が混ざって煙がどす黒く見え、別の世界を見ているようだった。いや水の中から首を出して地獄を見回していた。まだアメリカの戦闘機が一機二機赤い雲の中から現れて無差別に銃撃していたが、日本の応撃は一機もない。高射砲も応戦しない。ただなされるままだった。何故だ、何故日本軍は応戦しないのだろう。

明るくなるとともに惨状がはっきりしてきた。水から上がると夏だと言うのに寒さが襲った。歯がちがちと鳴って身体の震えが止まらない。気が付くと真っ赤な空の下の川原に沢山の人々が座り込んで見渡せた。水の間に間に流されていく死人が見えた。

やっと家族と一緒になれて、とぼとぼと家に戻った。殆どどの建物が焼け落ちて街の風景は遠くまで見透せる焼け野原になっていた。家に帰ると、二階建ての家は見る影も無く炭と灰に変わって、何処が我が家だったのか分からないほどだった。唯一台所の釜が一つ残っていた。前夜水を入れて研いだ米が熱で蒸かされていた。黒焦げになったご飯の上に木の蓋がパラパラと焼け落ちていた。黒こげのご飯の他に残ったものは、何も無かった。母が腹に巻いた郵便貯金の通帳と僅かな現金だけがこれからは頼りになるらしかった。空襲の後には雨が降ると言われていた通り雨になった。灰の混ざった黒い汚い雨だった。雨の中で大家さんの家族が固まって震えていた。

岡崎市の記録によれば、一九四五年七月二十日の未明より渥美方面から突然現れた米空軍の一編隊が突然岡崎の上空に現れ焼夷弾の雨を降らせた。最初の火の手は明大寺町に上がり、続いて大西山へと岡崎市街を包囲する形で次々と投下された。火災は漸次中心街にも起こった。敵機九十機が午前四時ごろ警報解除まで一時間半爆撃した。死者二百十一名、重軽傷者三百四十八名、家屋の全半壊七千五百四十二戸、被災者三万二千六十八名とある。

一時間半の爆撃といっても、後の街全体の火災や、米軍戦闘機の狙撃で一晩中苦しんだ者にとってはあまりにも非情で簡単な表現だ。

しかしなぜ岡崎だったのだろうか。町には人が住んでいるだけだ。工場もない静かな城下町なのに。軍事作戦とは思えない、爆撃後の米軍の戦闘機による狙撃など目的のない、逃げ惑う人間を面白半分に撃ってきたとしか思えない。しかも無抵抗だった、日本の戦闘機はどうしたのだろうか。応戦している気配は全くなかった。高射砲の音も聞こえなかった。川の浅瀬に座って警報解除になってもしばらく水から上がれずにいた時そんな事を考えていた。父はうずくまって真っ黒い顔をしていた。火傷で目だけが異様に光って見えたが、やがてごろりと地面に寝転がって雨に濡れている、

「誰か助けて下さい。お医者さんは居ませんか」

母が気が狂ったように助けを求めたが誰もが自分のことで精一杯であった。

一人の兵隊が握り飯を配っていたが、すぐ無くなって私たち家族には一つも亘らなかった。どこへ行ったかと思っていた兄が何処からか乳母車を引いてきた。竹で出来た車体は焼け焦げてはいるが車輪はしっかりしている。それに父を乗せた。救護場所まで押しているというわけだった。その後どうやって何処へ行ったか記憶がはっきりしない。父は川の中でずっと体を冷やしたのが幸いしたのか、顔に引きつりが出て高熱の状態だったが命は助かった。とにかく歩いた。途方も無い距離を歩いた気がする。愛知県岡崎から岐阜県美濃大田まで少なくとも六十キロはある。父を乗せた乳母車を押して母は背中に♫歳の妹を背負い、兄と僕は焼け残った飯の釜に焼け残った茶碗と焦げた飯と焦げた木の蓋の破片が混じった、選り分ければ食べられるほんの少しの白い部分を目的地へ着くまでの食料として運んでいた。釜の両脇についた取っ手を二人で持つと背の高い兄と小さい僕とでは僕の方にかたむいて重くなり釜のまわりの尖った部分が僕の脛を突つく。痛くて堪らなかった。

夜になって何処かで野宿した。林の中だった気がする。とにかく何処も停電していて真

っ暗になった。途中薄暗くなって貧民街とおぼしき処を通る時、「日本負けた、日本人死ぬ」の声と一緒に石が幾つも飛んできた事があって夜は動かないほうがいいと考えたのだ。その時は抵抗する気力も体力もなかった。

やっとたどり着いた美濃大田の父の知り合いの家は大きな田舎家で、泊めてもらえることになった時には疲れも飛んで生きていることを実感した。井戸水があんなに美味しいと思っただけではない。しかもその夜は米のご飯を御馳走になった、風呂にも入らせてもらった。「よく洗ってから入るのよ」と母は何度も何度も一人一人に言っていた。疲れは極限に達していた。

戦争はこの山間の田舎からは遠い話にさえ思えた。食べ物は無くても少なくとも平和に暮らせた。しかし戦局は悪化していた。御前会議は本土決戦方針を採択した。

僕も上陸してくる敵と戦うことになるのだ。ドイツは敗れ、ポツダム宣言で日本に無条件降伏を要求していたのである。沖繩が占領され、ソ連が日本に宣戦布告していた。子供心に最期まで戦うつもりではあったけど、どうやって死ぬのだろうと考えるようになった。死ぬのはいやだとは言えない風潮だった。広島に特殊爆弾が落ちた、原爆である。そして長崎にも落とされた。

そして八月十五日その日がついにやってきた。

ここ二、三日は静かな日々が続いて、何かがある様な噂が流れていた。生活はもう限界にきていた。お世話になってる家の人たちも表向きには親切だったが、いつまでもお世話になってるわけにはいかなかった。自分たちの食べるものさえままならぬのに、他人の口に入れる食べ物など構ってられない時がきていた。僕たち兄弟は栄養失調に陥っていた。身体がだるい、すぐ地面にしがんだり寝そべってしまう、無気力さは子供らしきもなくなくなっていった。目だけが大きくなってぎよぎよして手足が細くなった。あばら骨が浮き出し何本あるか数えたりした。それを見て母は、「止めなさい、そんなことはしないで」と涙ぐむので、また数えていじわるをしてやった。逆に何にも食べていないのに腹はいつのまにか膨らんでいるのだ。よく泣きべそをかくようになっていった。

こんな状態でどうやって敵と戦うのだろう。隣組の集まりで、母たちは竹やりで戦う稽古をしていた。僕はそれを遠くから見ている。僕も竹やりで鬼畜アメリカ兵と戦わねばならないのだろうか。学校にもいかなかったのは、転校の手続きをしなかったからだ。またすぐ移転することになるのは予想できたから。それに父の容体も芳しくなかったし、僕には何度も新しい転校先へいって、新しい友達を作る気力がなかったので都合だった。それに今は八月で夏休みの季節だった。もともと気の弱い泣き虫と言われてきた僕は、この戦争は頭では覚悟していても身体ではどうにもならないところへきていた。空襲の後遺症みたいなものもあった。あの時のことが忘れられないのだ。思い出すと震えがくるようになっていた。水の中で身体がゆれている夢をよく見た。起きていても揺れているように感じるがあった。

八月十五日のお昼ごろ、重大な放送があるからお前たちも聞きなさいと父から言われて、家族そろってお世話になっている人の母屋へ集まった。他所の人たちも何人か来ていた。

ラジオから流れてくる玉音放送の初めて聞く天皇陛下の声はラジオの所為もあったがよく分らなかった。皆だまって聞いていた。終わってからもなんだか分からなかった。暫らく沈黙があつて、誰かがすすり泣いている。その時後ろで母の声が出た。

「負けたのよ、日本は負けたのよ、戦争は終わったのよ」

それは周りの人たちを激怒させた。

「何をゆうとるだ、奥さん、何をゆうとる」

「そんな筈はない、あんたは裏切りもんだ、非国民だ」

静かだった場が喧しくなった。母の言葉に嬉しそうな響きがあつたのが皆を怒らせたのだと僕は思った。後はどうなったか覚えていない、僕はすぐ其処から逃れて外へ出た、そして走っていた。何故か嬉しかった、負けたのに嬉しいことを隠すために走っていた。もう死ななくてもいい、もう空襲もない、竹やりで敵と戦うこともないのだ。

僕たち家族はすぐ故郷へ帰ろうという話になった。長崎県の五島列島が父母の故郷なのだ。沖繩が占領された次には五島かもしれないと言われていたころはそんな話は全く出無かつたけれど。

この話がでたのは敗戦の夜の夜だった。父も母も大乗り気で、特に母はうきうきしていた。南の海のきれいなこと、豊富な海の幸、なによりも祖父をはじめ親戚が何軒もあつてしばらくは皆と一緒に暮らせるだろう、夫の体調をよくするにも調度良い、そうする間に世の中も落ち着いてくるだろう、高等師範学校は焼けて無くなったけれどまた何処かで復活して先生の仕事も戻ってくるだろうなどと嬉しそうに話していた。暗く惨めな家族の雰囲気さがらつと変わった。もう明日にでも行く気になつていた。その夜僕は嬉しくて眠れないほどだった。

翌日、僕は母につれられて近くの郵便局へ行った。母の腹に巻いて空襲から逃れた唯一の財産である通帳を持って、

「いっばい人がいるよ、何か騒いでるよ」

「本当だ、何だろうね」

郵便局の前に黒山の人だかりがしていて、髪を振り乱した中年の女が何か大きな声で叫んでいる、

「今日はもう帰って下さい、今日はもう終わりです」

台の上に乗って、何度も何度も声の限り叫んでいる。

「まだ昼じゃないか、どうしてだ、なんでだ、金がないとは言わせないぞ」

「そうではありません、こんなに急に大勢来たら間に合わないと言ってるでしょう」

押し問答から押し合いになった、女は汗を拭き拭き、拭いた手ぬぐいを振り回しながら叫んでいた、

「押さないで、明日きて順番に並んで下さい、」

「このまま並ぶぞ、夜でも明日でも」

僕たちは近づくことも出来なかった、群集と郵便局員たちはお互いに救いようの無い時間を通り過ぎていた。僕たちは汽車に乗る為のお金が要るのだ、お金が無くては、岐阜から長崎までいけない。

「早く下ろさないとインフレが酷くなる、俺が行ければいいんだが」
少しづつ体力が回復してきた父がすまなさそうに呟いた。僕に実際のインフレの意味が分かるのは、それからまもなくだった。

翌日からは兄が母と郵便局へ行くことになった。

日本中の鉄道が爆撃であちらこちらで線路が寸断されていて、すぐには五島には帰れないことが分かった。大阪や広島は混乱状態が続くだろう、汽車がまともな数がないらしい。暫らくはここで暮らさねばならないことになった。熱い夏の日、芋の葉をもらったり、雑草の内食べられるものを探して歩いた。農家の人たちはトマトやきゅうりを分けてくれる人もいたが、私たちのことを、何時までいる気なのだろうと、訝しげにみている。

もう秋口に入っていた。国民学校は元の小学校の名称に戻り、二学期に入っていた筈である。このまま学校へ行かずにはいらなくなるだろうと不安だったが、長崎の五島の小学校へ行けるからと父に言われて安心した。

有難いことにこの期間に父は顔の引きつりと両手に白い筋が残ったが、少しずつ元気を取り戻したように見えた。

ついに出発の日がきた。少ない荷物と餞別にもらった少々の米と籠に入れた10個ほどのトマトを抱えて私たち一家族は長崎へと向かった。

朝出発する時、それまで意地悪だった隣の男の子とその妹が、なんども手を振ってくれたのが嬉しくて何故か涙が出た。

今では考えられない長旅になった。汽車を何度も乗り換え乗り換えて、やっと夕方京都へ着いた。京都から汽車が出るのは翌日だという。夜遅くなって小さな旅館で持ってきた米をわたして食事にありつけた。しかし出てきた食事は殆んどが麦のご飯だった。

「米を渡したのに、どうして麦ばかりのご飯なんだ」

僕は物凄く不満だった。

京都を出て、恐ろしく異様な焼け野原になった広島町を通り下関、博多から長崎までの列車は酷いものだった。四人掛の座席に六人腰掛け、真ん中に二人がしゃがんで、窓から外へ足を出して窓枠に腰掛ける男もいた。通路は満員で、列車の屋根の上にも復員軍人たちが座ったり、寝そべっていた。便所の中も人で一杯になっていた。駅で止まって外で小便をに行こうものなら、戻ってきた時は居場所が無くなっていた。どうやって過ごしたのか断片的にしか覚えていない。覚えていいるのは、最後の食料二つのトマトが兵隊あがりの屈強な男たちにいきなり取られて目の前で食べられてしまったことだ。父が珍しく怒った。

「なにをするんだ、君たちは日本国軍人じゃないか」

「うるさい。俺たちはもう兵隊じゃない」

「子供が食べる食料を盗るとはなにごとだ」

にらみ合いになった、今にも父が殴られそうだ、危ないと思った。

「分かった、それではこうしよう。うちのこどもたちに、君たちが何枚も持っている軍隊毛布を一枚わけてやってくれないか」

しぶしぶ元兵隊の一人が毛布を一枚僕にかけてくれた。怖い顔が少し笑ったようにみえた。父の機転と毅然とした態度に僕は感動していた。しかしもらった毛布を後に焼き捨てることになる。

長崎に着いた母方の遠い親戚の家は原爆の中心から離れていて無事だったが、家全体が斜めに傾いていた。そこにはほんの少しの時間いただけだった気がする、長居は出来なかった。

長崎の船着場から小さな汽船に乗って五島の福江島へ向かった。海がひどく荒れていて、猛烈に揺れ、船底の客室は大部屋の畳敷きになっていて四、五時間の間中船体が揺れて、人がごろごろ転がっていた。僕はひどい船酔いになり、食べた物は全部吐き出し、黄色い胃液も吐き出して、気持ちが悪いのを通り越してこのまま死ぬのではないかと思った。下船してから又木炭のバスに乗り、煙の嫌な匂いでまた吐きたくなかったが、もう吐くものもなくて、ぜいぜい咳き込んで呻いていた。やっと目的地の祖父の家に着いたとき、

「顔が真っ青だよ」

「痩せてしまって、可愛そうに」

「お風呂に入りなさい、コンペイ糖があるよ、羊羹もあるよ」と次から次へと言ってくれるのだが、僕はとにかく眠りたかった。着いて縁側の座布団の上で死んだように眠りこけた。何時間寝たのか、十時間なのか、一日なのか眠りからさめた時、猛烈な飢えを感じた。とにかく水が欲しかった。

気がつくと座敷の布団に猿股ひとつで寝ていた、

「起きたの、一日中寝ていたよ」

「母ちゃん、僕の服はどうしたの」

「全部燃やしたんだよ、おまえのもの、兄ちゃんのもの皆のものね」

家族全員の下着にシラミがいたそうだった。何十匹も下着の縫い目にずらりと並んでいたそうである。母の髪に櫛を入れるといっぱい櫛についてきたそうだった。それに汽車の中でトマトと交換した兵隊の毛布はシラミだらけだったそうである。いつも身体中が痒くて、身体中に斑点みたいのがあった理由はこれだった。服を脱がされたことを憶えていない、おそらく眠ったままだったのだろう。眠っていてよかったと思った。シラミを見つけたり捕る行為を想像するだけでも気持ちが悪くなる。皆にうつらないように焼き捨てたのだろう。僕の服は従兄のお下がりを買った。お下がりといっても新しく勿体無いと思うほど上等に見えた。それを着てお祖父ちゃんの大きな家の大きな部屋のお膳で焼き魚や、野菜の煮付けと一緒に白いご飯を食べた。まるで天国だった。

「ゆっくり食べなさい、あんまり早く食べると、お腹をこわすよ」

母は一人で食べる僕のそばにずっと座って見ていた。餓死寸前の移動だったことが嘘のように思えた。こんな事は今日だけだろうか、それともしばらく続くのだろうか。祖父はむかし船主で、船員の旅館も営んでいたらしい。祖母が死んでから今はのんびり暮らしている。資産家で、何軒も貸家ももっていて母のすぐ上の兄、僕からいえば叔父さんに菓料もさせている。空いている貸家の一軒に僕たちを住まわせてくれることになった。狭いけれど庭もあって、日当たりの良い縁側も付いている。こんな生活は久しぶりだった。

学校は2学期がもう始まっていて、中途からの転校だった。僕の名前が珍しいので、どこへいってもからかわれる。そして必ずいじめが始まる。この時もその日の昼休みにやってきた。

「わら、おれ、かっか」
「わら、おれ、かっか」

と大きな子が僕を砂場に連れて行きいきなり投げ飛ばした。僕は小さくてまだ栄養失調ぎみだったので、あつという間に叩きつぶされた。「わら、おれ、かっか」とは「お前はおれに勝てるか」という五島地方の方言で、よそ者にはこうしてかならず洗礼を浴びせるのが子供たちのしきたりらしかった。

戦争は終わっていてもこの島ではまだ軍国主義は残っていて、子供たちの戦争ごっこが遊びの主流だったし、体育の先生は腰にサーベルを着けていた。にも拘らず、マッカーサーの命令といえば皆黙って聞いていた。戦時中のような教育勅語の斉唱はなくて、最初の勉強は教科書の軍国的な文字を墨で黒く塗りつぶすことだった。

体力が少しずつ快復しはじめて、二つ上の従兄から相撲を教えてもらった。毎日少しずつ上達して、得意技を覚えた。この島では相撲が盛んで小学校対抗相撲なども行われていて運動場には土俵があり簡単な観覧席までついている。僕を投げ飛ばした大きな子は二年生の学年の代表選手だった。何時までも馬鹿にされるわけにはいかない、いつかはやり返してやろうと思っていた。勉強よりも、ここでは相撲の方がメジャーなのだ。

チャンスがやってきた。小学校対抗の学内学年別予選である。僕の得意技は出足よくでて下からツツパリ上げ右手を取って、左足を相手の右足の内から掛ける、いわゆる内掛けである。これは、身体が小さくても、相手を見事に倒せる威力がある。三人ぬいて例の子と当たった。大接戦になったが、最後は体力負けだった。危うく勝つ寸前まで追い詰めたが力つきてつり出されてしまった。それからが学校が楽しくなった。馬鹿にされる小さな子から、一目置かれる存在になったのだ。大きな子も僕を子分にしてくれた。

ラジオのニュースでは東京の上野で毎日何人も餓死者が出ているとか、浮浪者の一斉狩り込み、ガード下に住む浮浪児の様子、大陸からの引揚者たちの事、それをねらってソ連の潜水艦が引揚船三隻を撃沈し千七百人死者がでたなど暗い話ばかりだった。そんな中で、その当時流行ったリンゴの歌だけが救いだった。

この島では朝早く近くの漁場へいき魚の売れ残りにありついたり、海岸にいけばその当時いくらでもアサリやハマグリが採れたし、食べる物には困らなかった。僕はなんて運がいいんだらうと幸せだった。父は早くから単身で本土に渡り愛知県の豊川市に移転になった高等師範学校の先生に戻っていた。春になれば家族も一緒に豊川へ行くことになっていた。

春先のことだった。五島列島に天然痘が流行し始めた。引揚者が持ってきたといわれていて、大小百四十の島からなる列島の何処から入ったのか、でもこの福江島までは来ないだろうと最初は言われていたのが福江にも来たという噂が広がった。島でもう死人が出ている話を聞いた。時間がたつにつれ、患者が近づいてくる。本土への一切の交通は遮断さ

れた、汽船も動かない、父の所へはこのままでは行けない。

又恐ろしい目に遭うのか、だが今度も絶対生き抜くぞ。

ある日風邪を引いて近くの医者へ行った。待合室で僕の隣におばあさんが座っていた。先に診察室に入ったおばあさん、なかなか出てこないなあと思っていたら、医者と看護婦さんたちがなにか消毒液を抱えて当たり構わず消毒し始めた。

「天然痘です、消毒します」

「そのままじっとして」

頭からつま先までぶっかけられた、まるでDDTをあたまからかけられたときの様だった。あのお婆さんの顔が忘れられない、思い出してみればおばあさんの顔に赤いブツブツがあったような気がした。恐怖の数日間だった。熱は出なかった。学校は当分休校になっていて、様子が分からない。周りの人がそれぞれに他人を警戒し、様子の違う人には不快感をもった。

進駐軍の衛生部隊がきたことを聞いたが見ることはなかった。やがて学校で種痘が行われた。長い列になって受けた、それがきっかけで天然痘は消えていった。次から次へ大変なことが起きる。しかしその当時僕はそれを大変な事だと思っていただろうか。それが当たり前の事のように感じていたのではないだろうか。世の中はそれが普通であって、それより楽な、それより苦勞のない、それより便利な世の中など想像も出来ないことであつた。マッカーサーが日本は四等国だと言つたが、ああそうなのかと思つただけであつた。

自分が辛い目に遭つたのだということが分かつたのは、本を読むようになったり、映画を観たりして外国の裕福な暮らしを知つたり、アメリカ軍の物凄い物量作戦で日本の軍隊を叩き潰す実写のニュース映画を観たりして徐々に惨めさが募つたが、子供の世界は両親と兄弟と周囲の環境だけが総てであつた、何にも無くても、その日食べることができ、遊ぶことができれば、それでよかつた。危機が去り、いよいよ僕たち家族はこんどは父の待つ愛知県の豊川市へ引越すことになる。父の勤める岡崎高等師範は一九四五年四月に開校になってすぐ七月二十日の僕たちが受けた同じ空襲で全焼したあと紆余曲折があつて、八月七日猛烈な空襲で破壊された豊川市内の旧豊川海軍工廠の跡地で焼け残つた工具養成所を学校の校舎にした。そして工具寮を僕たちの様な教師の家族や職員の住まいにしたのである。

着いてみると、庭を板塀で囲つた中に六畳二間と台所も風呂も便所もある家だった。父が先に行つて少し修理をしてあつたが、一つのほうの部屋の畳は腐つて床下に落ちていたので、しばらくは五人で一部屋に住んだ。しかし、玄関があつて庭が結構広い。アジサイが咲いており、ヤツデの木があつて、雑草が鬱蒼と生えていた。

「ここに野菜を植えようね、サツマイモも、なんでも出来るよ」母は嬉しそうだった。

「外の小川に魚がいたよ、ドジョウも、それに食べられそうな草も生えてた」

僕はもうフナを捕まえることを考えていた。

次から次へといろんな所から、教師たちの家族が引越してきた。一軒家に入る家族はラッキーな方で、大半が寮のような作りの長屋で真ん中に廊下が端から端まで通つていて、その一区切りの教室のような一部屋を一家族で使い、便所も風呂も炊事場も共同で使うよ

うになっていた。東京方面から来た家族が多く、この長屋の中で東京弁が飛び交っていた。言葉を聞いていると上流家庭で育ってきた人たちに思えた。こんな酷い生活には慣れていない様に見えた。僕は普段母のことを「母ちゃん」と呼んでいたが、同じ子供の彼らや彼女たちは「お母様」と呼んでいる。早口の時は「おかはま」と聞こえる、全部で十数家族が住んだが勿論地元の人は一人も居ない。

のちに地元ではこの集落ともいえる場所のことを先生部落というようになった。水道があり電気は通っていたが、炊事と風呂は薪を燃やしたし、洗濯は風呂場や庭でタライで手洗いだっただけでも有難いことだった。

皆で団結して、なんでもした。工員たちの運動場だった場所を耕してさつま芋を植え、トマトもキュウリも茄子もとうもろこしも実らせた。大人も子供も喜んで、し尿を運んだり、堆肥を作った。工員たちの旧食堂は大分傷んでいたが、イスもテーブルも無いので広々として子供たちの恰好の遊び場となった。戦時中工員たちが使っていた浴場は子供たちのプールになった。そこで自然に泳ぎを覚えた。近くを流れる小川は浅くて泳げないが、フナやドジョウやザリガニ捕りをして、たまに鰻が捕れることがあった。ザリガニは回虫がいるからと食べなかったが、鰻は勿論フナもドジョウも煮たり焼いたりして食べた。遊びと食料確保の両得だった。

集落の中には小さな池がいくつもあって、池の周りや他の上を銀ヤンマ、鬼ヤンマ、小鬼ヤンマ、しおからトンボ、むぎわらトンボが飛んでいて、秋には赤トンボの集団がやってきた。さほど遠くないところに松の林や、雑木林がいくつも点在していて、朝早くいくとクヌギの木にコガネ虫、カブト虫、クワガタ、が見つかった。先生部落の中には生物学の先生もいて、これはカナブンでもクロカナブンだとか、コガネ虫でもこれはダイコクコガネ、これは馬糞コガネとか教えてくれた。夏休みの宿題として昆虫採集は、ホルマリンを昆虫に注射したり、ピンの留め方などを教えてもらい立派なものが出来た。

先生たちの中には空襲で焼け出されていない家族もいて、本や玩具などがあって、雨の日など大勢の子供たちが集まって一日中過ごしたりした。子供向けのホームマー物語やグリム童話、児童文学全集などがあり、夢中で読んだ。子ども会を作って、SPのレコードで初めてクラシックの音楽も聴いた。僕は四年生になっていた。

集落のはずれにアカマツが多く生えているがクヌギや色々の木も生えている森があった。ぼくたちの部落から少し離れているのと、昼でも薄暗く、遠くから見ても少し気味が悪い様子がするし、大人たちからは、何故か行かないように言われていた。子供仲間でも雨が降る夜は幽霊が出るといって近づかないでいた。

ある日僕は町へ行った帰りにそこへ寄ってみた。初夏の明るい日だったし、何と云うこともない森に見えたり、怖い気持ちもなかった。確かに森の中は暗くじめじめしているが、所々に穴があったり穴を埋めたような跡があるくらいで別に別に変わったことはない。倒れたのか、倒されたのかアカマツの下にキノコを見つけた。あちらこちらを見回すと、色々なキノコが生えている。大きいや小さいのや、食べられそうなものや、色鮮やかな毒キノ

コと思われるのがある。大きな笠を広げた猿の腰掛を見つけた。興奮して歩き回ると、ところどころ土が軟らかくて、足がズボツと入るところもある。一度掘り返した場所が数多いことに気がついた。そんな場所ほどキノコが沢山見つかった。

食べられるキノコがどれだか分からないので、その日は少し持って帰って生物の先生に聞いてみよう。先生部落には、英語の先生や化学や物理や数学の先生に混じって日本でも生物学の権威と言われる先生も住んでいる。きっと教えてくれる。

その時だった。木立の合間に人影が見えた。しゃがんで手を合わせるようにしている、年の頃五十才くらいの男の人だった。足元に白い切花がある。何をしているんだらうと、もっと近づいて見るとこちらを見て、ぼくの持っているキノコを睨み付けるようにした。僕は走って逃げた。森の外へきたが、追いかけてくる様子はなかった。キノコを採ったのがいけなかったのだらう、多分あの男の人は森の持ち主なのだ。

友達のお父さんでもある生物の先生は持っていったキノコを見ていたが、

「何処で見つけたの、これは『しめじ』の仲間だ、食べられるよ」

「椎茸や、えのきだけを探すといよいよ」

「これは毒だ、紅天狗ダケの仲間だね」

「ところで、何処で見つけたのかね」

「近くの森です」とだけ僕は答えた。

「キノコはね、植物の腐れかけたところとか、なかには、動物の糞や死骸を肥料にしているものもあるんだよ」

「勿論、日陰や湿ったところに生えるが、ある程度光も少しは入る処を好む」

「また見つけたら、こんど小父さんを連れてってね」

僕はしばらくは誰にも教えるつもりはなかった。行ってはいけなと言われているし、他人の森かも知れないのだ。二度目、三度目と誰にも見つからずに食べられるものだけ採って家で喜んでもらった。ある日また森にいと、後ろから声をかけられた。ドキッとして振り返ると、何処かで見たとような男が立っていた。

「先生部落の子かね」

「そうです」

「ここはどういう処か知ってるか」

「この森はなあ、まあ座りなさい」と息をついた。

逃げ出しそうな僕を制するように、年寄りの白髪の混じった髭づらの男は、ゆっくりと話しはじめた。前に来た時森の中で白い切花を持って手を合わせていた男であることが分かった。

話はこうだった。

「広島へ原爆を落とした八月六日の翌日だぞ、豊川海軍工廠が爆撃されたのは。もう日本が負けることが分かっている、というより決まっていたのにだぞ」

「はい」

「二千五百人が死んだんだ。その中の四百五十人が勤労働員の中学生や女学生だったんだ。三百人は女学生だった」

男は言葉を詰まらせた。

「B29が250kgの爆弾を三千発落としたんだ。地獄だった。お前さんには、分からんだろうが、本当に地獄じゃった」

僕にも経験があると言おうとしたが、やめた。言える雰囲気ではなかった。

「皆死んだ、わしの娘も死んだ。だが遺体が無いんじや、何処を探しても無いんじや。バラバラになって、頭も手も足も吹っ飛んでどれが誰の頭かだれの足か分からんようじゃったそうな」

「この森はな、そんな身元のわからぬ遺体やバラバラの手や足なんかをまとめて焼かずに土葬したんじや、そこがこの森だ」

「はい」

「だから、ここにわしの娘がおるかも知れんと思つてな」

「何でなんじや、日本の飛行機は一機も応戦せんかったし地上からもなにも出来んかったらしい」

僕は自分の足の下に死体が何十体もあることを想像していた。生物の先生がキノコの中には動物の死骸を肥料にしているものもあると言ったことを思い出していた。土を掘り返した柔らかい場所が多いことの訳も分かった。

「多すぎて火葬する時間も人手もなかったそうじや、そりやあ生きとる人間より死人のほうが多けりやあ、そうなるだろうな」

「なあ、坊やそう思うじやろ」

「はい」

「娘がここにおるなら早く出してくれんか」

男の白髪頭がゆれて、顔がゆがんだ。

ついに僕は臆病者となって逃げ出した、早く早くここから逃げ出したかった。

「小父さん、さよなら」

と言うのが精一杯だった、走って森の外から振り返ると、男が老人になって小さく見えた。

この事は誰にも話さなかった。大人たちは、老人のした話は知っていたのかも知れない。だから、キノコは何処で採ってきたかと何度も聞いたのだ。あの森のことは言わなくてよかった。そして森には二度と行かなかった。知らなかったとはいえ人の死を足げにして遊んでいたのだ。自分の戦争体験などるにたらぬものにした。自分が生きているのは、戦争で死んだ人の犠牲の上で生きているのだ。文字通りぼくは、中学生や女学生たちの遺体の上で遊び、あるいは遺体を肥料にして生育したキノコを採って、ご飯のおかずにしていたではないか。

時は流れた。父の移動による転校で都会に住むようになると共に、何時の間にかこのことは僕の心の中の過去の秘密となって忘れられ始めていた。

中学、高校、大学へ、そして社会人となり、結婚して子供が生まれ家族をもつ身となった平凡なサラリーマン生活は、働き蜂に変貌して忙しさの中に埋没して転勤や単身赴任などの私生活の変化があったにせよ、社会の変化のテンポの速さの中に考えることを許さぬ

と言わんばかりにあつという間に過ぎた。その間日本は復興が始まり、高度成長と共に生活環境は変わり、都会や田舎の風景も変わった。六十年前からは想像すらできない変貌した国になっていた。おのれ自身も変貌し、子供の頃の惨憺たる終戦の記憶は遠く霞んで消えかかっていた。もはや半世紀と十年が過ぎたのだ。

そんなある日、僕は母校の古希を祝うクラス会に出席した後、親しい仲間数人で昔過ごした先生部落の跡地を訪ねた。六十年の間にこの場所は高等師範から大学の教養部へそして現在は工業高校に変わっていた。僕の住んでいた処は、文化会館が建っていて、僕の家があった場所は駐車場になっていた。家の前の道は、水溜りや石ころだらけの草花の生えた道から変わって綺麗に舗装され、車がひっきりなしに走っていた。道の向こうに流れる小川の岸はコンクリートで固められていた。水はよどんで、フナやドジョウの棲むところではなくなっていた。昔の美しい自然の面影は何処を探しても無い。

自然に足はあの森のあつた方角へ向かっていた。あの森の木々は、まばらになり、見晴らしが良くなって墓石が並んでいるのが見えた。墓地になっていた。入り口に諏訪墓地と書かれていた。何故かほっとした気持ちになった。墓石の間を歩いていると、当時の空襲による死者への慰霊を奉る大きな墓石があった。女性の名前がずらりと並び、下に年齢が彫られていた。殆んどが十代であった。

墓地を離れるとき、墓の間に生えたイノコズチの種が、ズボンの裾に沢山着いてきた。何処かへ連れて行ってくれと言ってる様にズボンの裾に着いてきた。僕は墓地のほずれのベンチに腰掛けて、一つ一つ取って捨てる度に罪の意識を感じていた。僕は終戦の遠い昔、この森の中で経験した事を思い出し始め、空襲、放浪、終戦、混乱、耐乏生活、と、一つ一つ当時の記憶が繋がり始めた。